



寒燈
 夜話
 小
 栗
 外
 傳
 三編
 三

^13
 3919
 15



門 13
號 3919
卷 15

寒燈 小栗外傳卷之十三
夜話

東都

絳山戲編

第廿三編

病を破寺に投して山冠を殺せ
途を草庵に索く兩婦を見ら

斯く小栗が郎等九人の們へ日あつて熊野山に到り小栗夫婦も見参
とらん夫婦の喜び斜らも遙か道は速く歩むを榮り多し九人の們を
もえぬ悪瘡全く愈む昔にかりぬ光景に夫婦恙なれさ人泣くは比税
ちりて耐助を人々對ひても我此地方に居ると誰か教へて尋ふと
同く池の庄司さみ出く中々我々常例に忍び敵の光景に寂寂ふところ
這般くこれ事ゆゑと常阿上人還舎しり結城坊朝の獲取討し有枝
有葉を細中へ入るへむと小栗夫婦今ふと上人の道徳を榮るや



今市堂九人まで集ふる。飯を討つて舒へきまあすと多し評議とす。父小栗満平も一回鎌倉殿の勅まきと蒙りしものなり。且飯を討つて京軍の免許を蒙り。爾して詮秀が討つと鎌倉との争ひなど。世の人々の念まり。免まれ角も便宜が求む。お軍家の免が好く。これより主従京都へ出て便宜を求む。おお軍の御代かき。せしめお南討なるが。爾えき便も江戸と空しく月日を送り。茲に美登小を郎の嚮。濃州小照天姫と守護し居るは。万長が許より足が討人と襲ふ。伯父ともいふは。防が戦ふ。姫と伯父の去向を失ひ。此も彼も捜索れども。さらし知れず。この万長もや。擡こめ。昔墓か。も。狐く。窺ふ。万長が許も居る。とて殿の跡を慕ひ。東國へや下り。あつらひ。

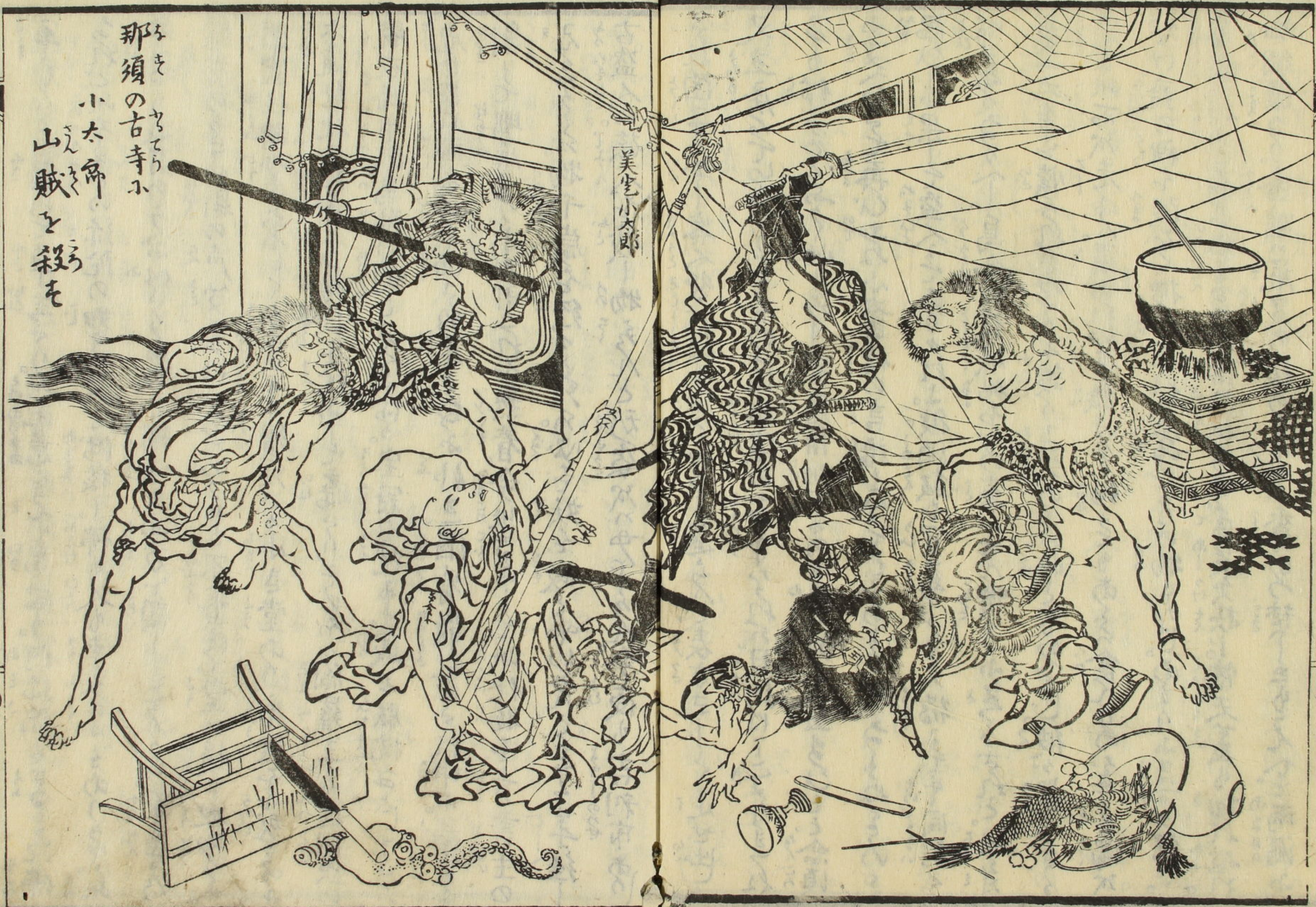
爾らこれより東國へ赴くと。鎌倉までゆり。其道さか。公とほひ。姫君のこ。おまけ。と更。お知。は。は。斯。常陸。や。誠。と。と。鎌倉。を。ま。ま。往。む。下。総。國。那。須。野。が。お。お。著。ふ。り。此。討。は。足。九。月。未。の。天。な。ま。い。日。の。あ。い。短。く。那。須。野。の。原。に。半。ま。い。と。や。西。に。お。ら。ま。の。宿。棲。り。と。し。村。鳥。幽。林。に。て。飛。声。の。も。も。憐。れ。の。悲。く。お。は。け。く。も。主。君。の。こ。思。ひ。お。れ。さ。ら。中。も。旅。の。夜。れ。袖。露。一。お。じ。お。み。居。ら。う。ら。お。日。を。た。ら。既。に。果。多。敷。そ。も。く。此。野。の。昔。近。衛。院。の。宮。女。玉。藻。と。さ。る。が。化。し。野。千。と。な。り。此。野。に。か。く。お。ま。り。と。三。浦。上。総。の。お。お。勅。決。め。り。て。特。に。あ。の。お。神。通。自。在。を。お。り。ら。た。お。お。狐。な。れ。ども。王。君。の。勅。命。終。に。脱。れ。は。せ。彼。お。お。矢。先。お。か。を。此。郊。原。の。露。と。消。し。と。尚。を。靈。の。石。お。止。り。妖。崇。は。な。せ。ん。お。お。羽。羽。尚。の。道。徳。お。く。悪。靈。終。お。ま。り。し。と。今。も。この。時。映。の。ころ。

時として其の怪異あり。今夜の月も四方のあやも并た目お
えり。のの遙か。叢の裡の狐火と耳もさう。ののこら。声も枯枝の虫れ
音と友を呼ぶ。狼の声。さう。は夜嵐の身に。さう。おそ。う。た。尋。ず。た。の
め。の。な。り。せ。び。氣。も。消。ゆ。も。失。ふ。ま。は。公。剛。なる。丈夫の。忠。義。の。為。に。旅。な。れ。ど。
斯。の。凄。き。心。も。せ。び。足。ま。り。して。歩。む。暗。夜。の。途。を。さ。失。う。あ。ら。わ。か
か。を。迷。ひ。れ。行。く。も。く。野。を。歩。む。始。勞。と。果。ら。ぬ。看。く。遙。の。森。の。行。く。一
道。の。火。れ。光。閃。出。り。こ。の。宜。れ。知。の。ある。さ。の。火。の。光。の。ほ。り。人。家。な。れ。ど。
さ。彼。亦。た。ど。行。む。も。用。も。假。へ。き。母。と。火。け。光。を。目。向。と。後。と。る。草。の。踏
つ。ま。る。足。母。は。り。して。行。む。ど。お。も。や。も。火。の。光。ある。処。せ。至。り。たり。此。亦。も。あ。ら。わ
足。を。窺。う。ま。り。さ。る。寺。也。枉。曲。に。影。墻。破。を。荒。く。て。人。の。住。と。も。あ。り。ぬ。お
厨。も。も。は。き。か。火。の。ほ。り。さ。い。ど。何。人。の。住。や。ら。ん。と。公。裡。不。審。ど。
斯。て。も。あ。ら。わ。き。ね。ね。ま。る。案。内。を。と。て。入。り。や。と。門。の。戸。を。は。と。く。と。叩。け。ど
唯。と。回。意。て。出。ま。り。戸。を。叩。用。く。者。あ。り。たり。彼。人。紙。燭。を。持。た。れ。ど。その。火。氣。お
す。じ。入。る。ふ。四。十。む。りの。法師。の。改。と。い。が。栗。の。ど。ん。が。乃。お。法。衣。を。ま。ま。う。と。を。て
甚。猛。悪。げ。な。れ。ど。大。白。星。の。め。き。圓。の。眼。を。ま。り。小。を。町。を。窺。ひ。も。て。驚。き
と。な。お。り。ら。ら。り。小。を。本。此。法師。が。光。景。を。見。て。さ。て。此。古。寺。の。山。賊。の。巢。穴
なり。な。れ。よ。と。是。を。捕。ま。す。ま。り。今。さら。ゆ。に。詮。さ。ば。爾。は。彼
ゆ。や。ど。の。を。を。せん。今。宵。と。て。母。投。宿。を。かり。此。法師。が。あ。ら。ん。や。ゆ。も。え。ち。や。
言語。を。和。め。て。さ。り。け。り。某。と。ま。り。國。の。の。め。く。東。國。方。は。く。ん。と。い。く。
と。る。ぐ。と。此。亦。ま。る。ま。は。る。此。野。の。道。ま。ま。歩。味。ひ。今。ま。る。あ。み。を。ぐ。り。と。ど
里。の。方。へ。出。を。始。勞。と。て。母。宿。を。せ。と。思。ひ。も。遙。お。此。は。寺。を。入。受
は。れ。ど。勞。也。足。を。曳。て。さ。る。ま。り。然。る。今。夜。の。宿。を。あ。ら。ん。と。い。ふ。

小栗 卷之三十三

侍の最末より物を案ずる形あり。今の言語を以て打聽して回意せし。
えりふぢり。此の邊の狩は荒果する古寺なれば夜衾をさらしはぬ。とて
飯をば。それぞ厭ひものぞ。這裡に入りて宿りたまふと前もさす。清江に
小を寄る。さゆして傍の殿はほしく裡に入ると厨の方へ付ひて洗し
地爐の湯を居人煙茶の食器。さて云々。前もさす。破ちの
ことよ。とて一飯の時も好し。今日のつら。某少く病む。村落を出て
銚子へひらき。客人ののほく。ちやぶ。銭を牛。又を貞道市。行て酒飯を
取。とて。小太師宜。とて。飢。爾のれ。房を煩。とて。いと
畏。と踏踏。法師ゆる。若。か。ん。と。銭をよ。め。入。と。透。せ。市。ふ。行。く。も。
酒飯を好。と。僧。促。は。い。ざ。ら。は。房。を。煩。い。や。さん。と。腰。裡。より。銭。を。出。し。
よ。の。れ。傍。の。浅。を。敷。て。これ。を。幾。許。の。酒。飯。を。好。と。厨。の。棚。より。欠。換。

とて陶子と申。客人物付行くと買。とて。還。ら。ん。と。表。方。さ。し。と。走。せ。出。し。
又。立。房。の。て。り。さ。う。と。か。は。出。陰。の。古。寺。な。れ。ば。目。別。に。い。ま。り。と。れ
る。も。付。ら。め。ど。あ。く。怪。み。も。う。さ。角。此。の。三。居。で。外。の。出。り。ひ。と。念。頭
め。ま。へ。ち。き。て。再。び。お。ね。小。太。師。傍。の。言。語。を。以。て。と。め。り。た。う。ら。ぬ。と。め。と
思。ひ。一。果。て。盗。入。と。あり。を。後。よ。彼。酒。飯。を。買。す。と。い。ふ。傍。を。て。同。敷。を
取。す。う。ら。へ。鳥。合。の。盜。賊。ゆ。り。の。奉。う。せ。ん。憐。う。ふ。と。さ。れ。と。此。を
め。一。大。奉。を。懐。か。れ。み。づ。り。の。誤。り。の。失。の。悔。と。も。か。く。じ。彼。が。還。ら。ざ。る
前。此。の。狐。走。る。雨。あ。れ。い。と。餓。う。ら。ぬ。ゆ。り。の。あ。ら。い。食。入。り。の。を。手。燭。に
かけ。厨。の。裡。を。隈。なく。捜。索。せ。れ。と。露。む。り。の。物。も。な。し。あ。ま。り。の。ヨ。尋。う。移。り。
客。殿。へ。行。く。と。ん。が。本。さ。の。阿。弥。陀。仏。さ。う。う。り。足。欠。換。で。幡。天。蓋。も。切。れ。破。れ
蜘蛛。濃。る。香。爐。の。胤。足。の。痕。の。を。巾。一。香。の。り。り。焚。く。と。も。い。へ。と。漏。れ。



美宅小太郎

那須の古寺小
 小太郎
 山賊を殺す

魚がうんとお腹出て草生まると。此光景を見て思ふ。阿流陀と云ふは佛
 あれど此奉るの流陀の如きついと洗猿。佛も人も幸不尊とありと云ふ。此
 奉るも我身のうらふ似るやと。獨まき四方を顧ふと云ふら奉尊乃
 後者のうらふ聲の声々へたれば。いづれと不審は。堂の後廻り出ま
 此下位牌堂と云ふしく。本堂より續けたる小き堂あり。其裡を空規と云ふ
 六道結化の地帯。湯杖を枕して寐する。その不ろ閻羅王三途川系
 脱衣垢牛馬の們と云ふ。宝冠を枕し。或は眩枕と云ふ。此
 虎の皮れ禪を出し。西さぬ東さぬ。小酒肴散乱し。中々高き
 衝して睡居る。小太郎これを熟着。今此もかして此化物を青書生の
 ころろろろ物千歳を経ると云ふ。必と妖を做とやいらん。こまに手経
 古盗人の旅人を感し物とんと。形姿はかゝらん。今夜も吉利市あり
 や。酒肉は飽く。熟睡せり。我今餓なり。此酒肴を食ひ。其け化物等
 醒し。後膳をば。はしと笑ふ。配盤の前。よけを志めて。飲わど。今合はは
 幾許の酒肴を露も。独まきと飲食し。六七分の酒肴を帯び。心裡頻々
 此のいども。隠るし。扇まんののを。四方をみる。古なる銅鑼を火桶に。側
 あり。うら。こま。宜しの。と。あれと。炭灰も。ちら。捨て。力。か。ま。は。して。撃。し。る。地。花
 閻魔を。こ。も。と。し。み。る。数。は。く。目。を。醒。し。起。久。り。て。足。元。入。る。仁。王。の。ど。れ
 大。津。不。の。枕。れ。上。ま。ま。踏。り。鐘。の。ぶ。れ。声。を。揚。念。仏。を。唱。へ。銅。鑼。を。拍。子。に。ら。ち
 居。り。地。帯。大。き。ま。怒。を。は。じ。住。侶。の。方。へ。行。く。は。ぞ。此。狼。藉。者。の。ま。ま。と。云。ふ。
 ま。ど。我。も。告。る。し。人。の。油。ひ。ま。く。ら。と。云。ふ。が。ま。入。り。て。下。知。され。ば。閻。魔。も。鬼
 の。心。ぼ。ろ。と。各。々。小。得。物。を。提。げ。小。太。郎。を。中。に。囲。り。小。太。郎。呵。く。と。打。を。ひ
 此。地。獄。の。酒。肴。を。多く。あり。ぬ。と。云。ふ。ゆ。ゑ。陽。府。う。ら。此。下。を。く。と。ま。ま。と。云。ふ。

さあこの酒肴を飲まう。飲まう。酒肴の真もな。せめてのこふ汝も。睡をすまはし
藝げく。さしてたのとも。厨心んと。さして。鋼海を打つ。此拍子。打連く。
躍をむらり。入る。和と。飽まで。欺き。へ。地。これ。を。な。の。腹。居
く。錫杖を。小服。提。躍。出。彩。春。の。悪。亡。老。陽。府。母。あり。ても。は。つ。ん。地。前
の。面。も。三。回。ま。く。磨。れ。が。腹。を。ま。と。い。う。該。あ。る。と。忘。と。一。や。汝。だ。じ。め。て。ま。て
酒肴を。盗。ん。ぐ。飽。まで。食。ひ。と。れ。り。鋼。躍。を。打。つ。じ。我。們。が。秘。り。を。破。き。し
今。又。あ。る。を。欺。ひ。く。沈。く。嘲。呼。さ。し。け。る。こ。足。此。こ。の。罪。を。作。る。ば。悲。を
主。と。さ。る。我。う。が。ん。その。は。く。小。免。これ。海。を。一。て。修。羅。道。に。落。ん。ど。る
小。免。悟。世。の。小。園。王。も。獄。卒。も。彼。を。脱。し。も。ひ。と。湯。杖。を。振。く。う。う。く
か。れ。が。閻。魔。も。鬼。も。一。般。は。鉄。持。う。ん。ど。う。揚。て。小。を。拜。目。が。走。奇。う。り
小。ま。く。こ。と。瓜。物。も。せ。ど。我。平。く。瓜。背。ひ。く。劍。弁。の。躍。さ。我。も。相。手。に

まの。びん。ふ。よく。躍。ま。よ。と。云。は。く。も。腰。の。佩。刀。抜。放。ち。地。霧。が。打。こ。ひ。錫。杖。は
只。一。刀。切。落。し。其。ま。踏。こ。み。大。袈。裟。か。ぐ。ん。と。ま。ん。と。斬。り。り。り。早。を
又。う。り。閻。魔。も。鬼。も。脱。衣。焼。も。か。る。じ。と。逃。走。り。も。く。脱。は。じ。と。或。は。梨。子
割。車。切。又。撲。切。よ。と。ほ。も。あり。一。盞。茶。付。は。残。り。斬。殺。し。け。ま。わ。が。表。の。方
を。望。み。ん。ふ。松。明。あり。そ。く。大。勢。の。這。行。を。さ。く。く。ま。る。ま。ま。の。れ。ど。あ。も。く
前。知。れ。出。行。し。主。の。僧。れ。同。於。を。傳。へ。還。り。ま。あ。う。ん。足。を。殺。し。此。寺。の
盜。賊。の。根。を。断。ぐ。や。と。牙。磨。ひ。て。ま。う。じ。が。又。想。ひ。入。と。ま。う。行。志。じ。我。を
少。の。空。易。な。ら。が。は。大。る。あ。り。も。形。或。る。や。か。は。い。ひ。苦。さ。失。の。あ。ら。う。ん。は
つ。づ。の。牙。を。り。て。忠。義。を。せん。今。殺。し。は。者。ぞ。も。酒。狂。の。上。れ。戲。こ。と。なり。
時。運。ふ。か。る。い。牙。を。傷。祿。ね。ふ。あ。れ。幸。ひ。と。い。ひ。ん。ご。脱。き。去。り。如。は。し。と。
慌。忙。く。行。本。を。背。負。ひ。裏。の。方。より。脱。れ。出。ま。は。し。て。も。一。箇。こ。と。既。小

七八丁小及び一五二人の人を殺し。さきま走りてなつた息もきれずも
勞とある木の根に腰を掛。志心休憩せり。素より不知案内
の地方と云。猶小暗夜のるや。めね。此を何方と弁う。を裡急や
角の妙小あ。均しき人するや。今事。道を燈。た。一人
するのあり。回迫く。彼りの響。いは。光景。て。立止りて。まじ
る。其。中。居る。何人。も。同。く。正。しく。古寺の。悪僧の。声。は。似。し。し。と
這方も。響。き。星。ま。じ。し。る。ま。じ。る。傍。り。る。ゆ。ゑ。こ。の。空。を。照。り。し。る。
のよと我。ハ。別。ち。甲夜。の。や。ど。汝。寺。小。宿。り。し。旅。人。あり。と。云。は。し。も。
躍。り。か。ん。て。技。打。の。声。を。知。り。し。と。斬。れ。ど。啊。と。い。は。し。仰。ぎ。ま。
仆。く。と。え。ん。じ。が。水。音。を。聴。き。て。貌。す。こ。と。妖。怪。と。め。じ。と。其。と。爲。と
搜。り。ま。じ。し。る。と。井。と。お。ぼ。く。圓。く。深。き。穴。あり。と。此。古。井。の。行。へ

落。た。れ。よ。と。ど。め。の。么。安。堵。る。甚。る。れ。と。う。り。と。それ。より。途。を。捜。索。
行。ゆ。下。り。な。る。に。一。軒。の。白。屋。の。前。に。出。り。此。家。小。ま。寄。休。ん。と。い。ひ。て
こ。も。又。緘。の。住。家。あり。と。疑。心。を。發。し。蜜。垣。を。越。て。窺。り。し。旅。人。二。人
の。女。性。人。も。ち。髪。を。緝。麻。を。履。き。一。人。と。年。以。三。十。を。や。さ。ね。と。え。ん。又。一。人。を
三。五。と。う。の。小。女。の。う。ま。も。醜。く。な。容。貌。ゆ。て。母。子。と。い。は。し。る。其。の。面。似。を
何。ぞ。ぬ。き。う。め。き。家。あ。ら。わ。し。男。子。も。え。ん。と。い。は。し。た。と。賊。の。家。を。と。せ。ま。
么。お。ん。き。こ。も。あ。ら。わ。し。此。事。を。湯。う。り。と。も。清。く。鍋。を。も。休。め。ん。と。戸。を。わ。ら。く
と。叩。いて。案内。を。と。へ。三。十。と。う。の。女。唯。と。回。應。て。出。ま。り。戸。を。開。き。声。を。掛。
今。此。事。何。ぞ。何。人。ぞ。と。云。ふ。小。ま。某。の。旅。の。者。と。云。せ。ら。は。し。と
め。り。と。道。を。急。ぐ。ま。宿。え。き。期。を。さ。し。人。家。も。な。れ。世。を。た。ど。り。く。あ。の
処。へ。吟。呻。す。は。し。る。此。家。を。と。ら。ひ。と。う。り。と。暗。夜。の。燈。火。雪。中。の。炭。此。を。必。を

入て入勞きも出二足と歩むも懶ゆるふ。類すおらして休憩も。さてこそ
 爰をおどろしはれ一夜の宿を頼まわらさる。公なくも畏たれば是が
 那はあふまじ。背射るも体はくまひらんや。と侮れなく頼まひら
 女ハ裡よりさ一歌き。小を弁がさぬ寂寂ひえ。かて戸を推開れ。は結を
 ぬくふいと傷やくらむと。這裡入ふし多人とらば。小を弁をばひ程入
 爐邊に腰うちかたれば。女と茶を汲これ飲。秋の夜風のきくおれ火は
 わらじ中さんと柴折く焚はく火影よさし。小を弁がさる。月か
 すしうらるる。袖や裾ハ朱の血も濡てめり。は咳然としく驚きまら。
 俄にまて物陰小少女を招きさくやと。小を弁をさる。これこそ我衣の血も
 をんぬ何する人々と怪て戒嚴さるめてあふんぞん。さても斯なれう人から
 彼もさるもあやしく。同明りてえんものと。女はうららら對ひ。おと等ハ

我衣の血も濡を不審て驚きまらと。おぼゆ。さるもあふ縁故
 あり。その跡もて語りはらん我まこと。二人と此故は家も居るあふ
 こと。あう怪むま。はくま。語り多人は。為思ふ人。は。い。女をか
 見合。兎角の回意する。しが。背射る。あつて。年増女。小女。うらら對ひ。おん
 何とおぼさ。中らん。此旅人と。今らん。再逢。えん。といひ。復。又。人を傷害。一人と
 入て。衣類血も濡。染る。せ。志。まの。る。ど。き。れ。と。恐怖。く。あ。り。と。も。
 其の骨柄を窺ふ。よ。尋。常。さ。ぬ。豪。傑。と。え。お。ま。は。は。や。我。上。の。憂。難。許。を
 云。へ。只。顧。よ。の。む。程。う。ら。鯨。よ。る。磯。虎。ハ。廿。日。誘。引。ゆ。と。も。彼。さ。り。ふ
 呵責。これ。恥。う。も。受。え。ん。よ。り。遙。き。場。と。お。も。は。ゆ。わ。げ。の。所。由。を。語。らん。
 しく。母。の。や。と。云。笑。ゆ。ね。小。女。ハ。喜。ぶ。色。入。て。命。ま。ま。と。再。願。ひ。さ。く。は。物。結
 ぬ。と。と。い。ふ。女。ハ。小。き。う。ら。ら。對。ひ。は。云。出。た。れ。我。こ。が。身。の。う。ら。と。包。ま。い。て



源氏物語

源氏物語

郊原
久野
殺却
同草
途

小太郎

中いほふ艱苦を救ひまわれよ奴等も小女も素の都近きものぞてなむら
 去りし此地方をさぐる村山賊の爲に奪取られ此亦は擄まの身となり
 妻くの賊は姪取しての幾許の苦も猜し多斯むうのゆく恥も受る
 此身は生存命居るべきありあはれも難回りの心よて今死をて易
 されと故郷の親族も今一回遠く苦艱を告げ入るも角も倣ふと
 一日こことさぬる其隙を伺ひて脱し出んと公配とて賊もまこ足は猜し
 其守嚴めて去るに万夫の勇者ありて誘引出まの逃まがこし
 足下のやうを察すや人を害し多むも教ふかまぬ光景の世に比ひなれ
 勇者とていぬあれ我々二人が身は故のせむ人とせむれ小を年首尾をなめて
 笑へばるぞふあわれむさぞ悲しくあふむら入まれば斯る離をなすは只
 二人して居るなれば脱し出んと難くまきふなと速に走らむらぬ女も
 又て云思ふのここと宣ふりのう形暗夜にあれば此山の四方へ入るまはしき
 あり名におふ鳥川と印幡沼と狭まれば只西方の山陸に瀆たりそいふ
 古寺ありて賊多く會へる其寺を過るに仇は出まじこもて賊の護
 ありとせやせり小を命云我を其寺に宿り這般のここのの其のち
 途中て又如此くの半ゆりて古寺まへのこ途中ゆりて傍を殺せるゆ
 細中も語りまれば二人の女を愕ゆと驚きまらむらりこ小を命不亦女と
 悪傍を殺せしに命より怒りて涙しはらふ傍は由緒の人なりや又ハ賊の同類り
 此二の内をめぐり我の則ち敵なり女もも其能を報んとおりの公あは
 まよつて勝負せよ運を天に任せしむらむと急ぐまら女怒りたむら
 うちあり否く爾らみのるまじ今もせへまこて賊も入仇こそあれい
 彼もたれ死んや奴家二人が驚き古寺の傍を容易討まると宣ふら

中いほふ艱苦を救ひまわれよ奴等も小女も素の都近きものぞてなむら
 去りし此地方をさぐる村山賊の爲に奪取られ此亦は擄まの身となり
 妻くの賊は姪取しての幾許の苦も猜し多斯むうのゆく恥も受る
 此身は生存命居るべきありあはれも難回りの心よて今死をて易
 されと故郷の親族も今一回遠く苦艱を告げ入るも角も倣ふと
 一日こことさぬる其隙を伺ひて脱し出んと公配とて賊もまこ足は猜し
 其守嚴めて去るに万夫の勇者ありて誘引出まの逃まがこし
 足下のやうを察すや人を害し多むも教ふかまぬ光景の世に比ひなれ
 勇者とていぬあれ我々二人が身は故のせむ人とせむれ小を年首尾をなめて
 笑へばるぞふあわれむさぞ悲しくあふむら入まれば斯る離をなすは只
 二人して居るなれば脱し出んと難くまきふなと速に走らむらぬ女も
 又て云思ふのここと宣ふりのう形暗夜にあれば此山の四方へ入るまはしき
 あり名におふ鳥川と印幡沼と狭まれば只西方の山陸に瀆たりそいふ
 古寺ありて賊多く會へる其寺を過るに仇は出まじこもて賊の護
 ありとせやせり小を命云我を其寺に宿り這般のここのの其のち
 途中て又如此くの半ゆりて古寺まへのこ途中ゆりて傍を殺せるゆ
 細中も語りまれば二人の女を愕ゆと驚きまらむらりこ小を命不亦女と
 悪傍を殺せしに命より怒りて涙しはらふ傍は由緒の人なりや又ハ賊の同類り
 此二の内をめぐり我の則ち敵なり女もも其能を報んとおりの公あは
 まよつて勝負せよ運を天に任せしむらむと急ぐまら女怒りたむら
 うちあり否く爾らみのるまじ今もせへまこて賊も入仇こそあれい
 彼もたれ死んや奴家二人が驚き古寺の傍を容易討まると宣ふら

彼傍の足盗賊の大なるり。同く悪徒の群あがら。ささか出家のこゝろなれば此二の
 情もなふり。故するての非道もあらぬら。今日まで存命居つれと彼亡のらさ
 うらうらん憂目よ遭も知れが。叔こそ尋ねるにけり。爾れ傍かと尋
 まふと部下の賊の知るまじ。多れが明且まて誰とて。此ふらするは
 あらむ。静ふ休憩もひ明日中至る。わらわもして奴た二人は侍ひく。
 此地方を歩はし。多くとらら一人の女厨の方より酒肴を持出。是の毎夜
 賊の身もて飲食する料は侍とて。物持たせり。さるること。是と飲食て
 勞れを慰め。人やと。わらわも小をうらち。侍ひ。おとら。我らもわらわら
 明日の必を侍ひく。此地方と去る。你くわらわも。多ひ。侍ひ。い。い。出
 る。此酒肴。あ。と。さ。る。が。明日此地方と旅券の書。酒宴。用。ゆ。お。入。ら
 今夜の主なり。一杯飲ぶ。我。ま。せ。い。ざ。や。と。鈍子を手に。わらわ。三十斗のり

女子が雨ふ。命よ。任。せ。と。盃をさ。揚。く。既。お。吞。人。と。と。折。の。ら。外。方
 暴。雨。闹。く。多。人。の。す。る。光。景。の。り。女。の。さ。ら。り。小。太。郎。も。侍。と。あ。や。な。ち
 あ。ら。は。す。射。小。女。と。戸。の。隙。より。外。方。を。窺。ひ。て。立。戻。り。つ。ま。へ。り。さ。ら。り。今
 こ。ら。ふ。あ。る。り。の。傍。の。部。下。の。り。の。ど。も。あ。て。ゆ。を。う。荷。ひ。ま。さ。る。こ。先。客。人。を
 奥。か。入。背。射。忍。び。ま。ひ。深。と。一。室。の。裡。お。入。ら。り。

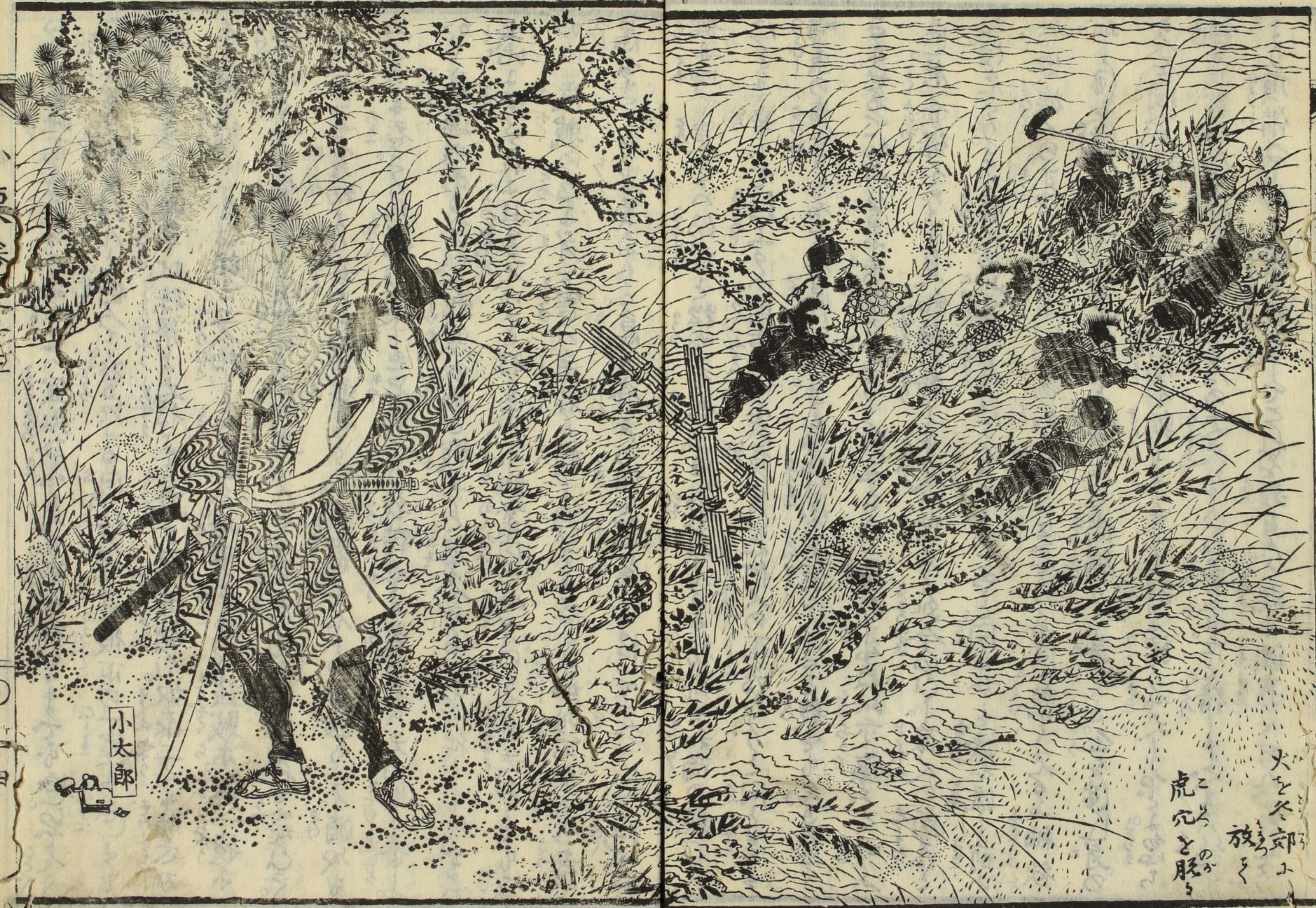
第廿四編
 壮夫郊原小草賊を討
 孝婦白屋小我男小舎

且。説。小。を。多。の。女。を。う。ら。い。か。は。し。一。室。裡。小。忍。ひ。居。て。紙。門。の。隙。より。さ
 覗。き。その。光。景。を。窺。ふ。よ。二。人。の。女。の。外。方。の。戸。を。押。開。け。か。多。人。が。一。大。き。を
 出。ま。さ。る。あ。ま。方。と。や。と。云。の。ひ。ら。何。や。ら。荷。ひ。家。裡。お。入。や。と。我。頼。を。持。出
 布。を。出。し。給。ふ。と。い。は。し。小。噴。き。ま。さ。る。何。あ。ら。ん。と。熟。く。を。わ。彼。古。ま。の

傍の血もみみれで自死も終らぬありて居るを女とてこのいふ何人か
做らぬと人々同くかき荷ひ事一人のらち年長とて渾子がいふ今夜
旅人の寺より宿りて宿りてとらぬ和尚をさぬとらぬいと猛りした丈夫なれば
よき宿りのいふありとも小勢ゆへに故對かじと旅人をかきむき寺は
和尚自ら我れをほひ集りて還すはるふ旅人のいふも隈を捜索する
豫て妖物は打打くる地蔵の六箇魔の大衆牛乳の丑馬の字た二途の
境まで殺されしむらさける旅人の所為るめいふ猛き人ありとも安内
まふねりのあればさるべき逃すまふさ追付く仇討せん我こそ西の
方と尋ねる此方のけ家と隈ならねばさふ足が止めんか必定るれば身も
と一失りたりやと和尚自ら事あり我れ西の方十町をりも追及ら
るる人影もさるゆゑ此方のゆれまはらしく走居りする途めて古井の

裡に呻く声この何者と松明を照しは眠るるを彷彿と和尚の貌は
たる辛く引上る斯重傷を負ひ何人の正なるなりと問と答と
啼虫の声音もやそは息はらむと仲間の大おをむと殺さる事あり
さめておみも未期のまはらば中らんと荷ひ事な此市傷る叶ふ
まは社介保をかり身和尚を斬しを人の猪とて今いひ旅人の所為と
おぼえたりさる旅人の此家へ事ありとらぬやと問女と涙を流し前
此二人旅人の事ありとらぬのゆゑ欺きとてさるに熟くする袖袂
血は血も流くあり故に曲者と思ふら尚編りてまくと公をはし身の
人を同く鈍く寺のこと和尚を斬しゆき人も詳な語りゆへにやどは
響き報ひんと想へ彼れ尋ねの大夫なると勇者と猪とをいふ語て
より頂備やか麻木酒をさるを殺さんと既酒宴をせん

東海道



小太郎

火を冬郊
放す
虎穴と脛

おんら此女討ふ事なれば宜処へ事入る酒を飲らばもはしりて
 のかたうり仇を討んと修らるる風情をよせ彼西の一室女忍して
 足下等々も此年比株梁よ大なるよと呼ぶ人敵の奴亦二人助太刀
 きて彼を討さしむひ糸と二人揃て笑えよ此女事なる盗賊亦渾一殺小
 兼ひ女を安内女這社のさ討入らんぞ光景也小太郎これを定む
 さればこそ室初より女をらの稱さるる不安とてんもあつる酒飲も
 みどり母をさるる斯るべとぞいふなり我猪子母差らぬ天の助る香
 かく高運のあるるされば邪悪の賊と戦ふこと思入るべきゆへあつる彼等
 土比は馴れぬ且多人のておどろば不知案内の此女の人過失するとも云
 かに兎賊の女身と害の主君女對しひもまほし不知此女をさら去て
 恙なきこと忠義なりと急母脊戸の垣を越えまほして走り行せり

みみ川流れ又大泥もて水深く浅きき舟さへは小太郎今詮を好く
 岸辺よきと嘆息我忠義入主せんともいふも腹内めと盗賊もす小
 笑ふること不厭此事て腹をすまされと此巨川や大泥ふた一艘の女身も
 ね皇天我をて此地方と去らぬもなごのやと躊躇らるる襲れよ
 尚此上の恥辱ありさるる足下のさ房の盗賊亦と戦ふ彼亦と殺しつら又
 此身をく舟失あり二ツ一ツ変せんと是悟極めて今舟はる途を索めて
 戻らるる又賊方めら旅客を捉へ討つる人の仇を報つる既に一室二打
 へるもさるもいふ小旅人を何処へ退去の勢もあつるさて今光景を定む
 知りて去けらん西方へ走らんぞ我れ此女在つれば知らざることよもあはじ
 東の方へいけん彼方と川と大泥とあつる洲奇が浪りかたは翼かゝて
 逃さるるにぞ唯待て討つる傷の傍に女は滝殿を慕て走出る

とも知らずして小太師の... 只今賊が松明を... 只今賊が松明を... 只今賊が松明を...
 遙よえるふ折く風が松明の火を吹散くは松残る松や海の中燃付を熟くと
 入くらふやう此野の末と草のてく川よりわ... 業最るの今此賊を彼よまを
 せよ後より枯草の火をかえんごるもの好く前より水ありて逃ぎ出まき
 処なり幸い今夜西風なれば後の火の烈くして終る火焼失ぬばや
 命の助るとも牙辨焼れ移まざし然るとれぬ方なくして此多人を討まん
 これ窟竟の深ぞと獨る生茂る叢の裡より又潜め賊のくるは待た
 賊の形とも知らずして旅客らも猛をも不知案内ののかわれが逃く
 よもあはれ袋の裡れりのよも尚ほやとと勇みは競うて此正なる
 行小行く彼草のこたふに至るの小を年討ふと... 叢の中をま
 出く腰刀をりて枯草を早よ切ると盗賊のこたふ跡の道も積り腰の

燧をさる出くやうて火を移りて折らぬ夜宵のいとをけり積
 並は枯草俄に燃まき我の方へ靡きしう賊のれをよもあはれ
 かけぬておれぬ只愕然とるなるめて消んともせざとあはれう火勢
 盛んあたる草木もらるる一般に火として焼くゆ懐行く盗賊も松や
 衣類も火移り喚き叫びて死するもの或は煙を失ひ川へ特びて
 死するもの水火の責おま人の猛悪を賊の強盗本数をそくと亡びる
 足年草の積悪を自王天振怒るひてまを小を年借く此亦も亡び
 身あはれまを小太師の死地に入て腰を難うしお不思議の謀を
 出し其刀差されたのみあはれ賊を殺しそまこと智勇のいとまぬとま入
 忠臣の誠を天も憐れ真助をたまふる人し積善の家なる故慶あり
 積悪の家なる故咎あり

賊衆を殺しけし。面い。其の家の家に至る。二人の女の傍に居りけり。住居
 きの。小太郎血刀が抱いで少裡に入ると。女の驚きけり。美藤國
 一声して云。汝賊婦我を欺き。虎穴に入らじ。始命を失りてを。其の
 天翁の助まら。我一人の力もて。賊を殺しけり。今又こそ。其の
 汝をも誅せん。あ。あ。是れ我所為と。い。おのづから。足まで。幾許の人は
 殺し。其身の業をなす。ける。報ひ。今日相見ひ。知れ。い。い。汝は出るもの
 女は還る。聖人の言。的確乎。と。云。け。猿臂をの。て。女の襟を
 ち。と。捉へ。仰さ。あ。あ。引。持。し。刀を。り。て。既。刺。んと。志。す。る。お。小。女。を
 足。を。さ。る。も。も。お。そ。く。も。縛。り。け。き。と。な。す。と。は。し。と。争。を。妨。げ。せ。と
 う。故。ら。腔。竅。は。小。女。が。心。下。を。さ。と。又。お。母。を。け。が。意。志。の。重。傷。と。一。声
 あり。と。い。ふ。お。母。も。其。ま。う。息。を。絶。て。さ。り。女。を。こ。れ。を。ら。ち。さ。り。さ。り。し。ま

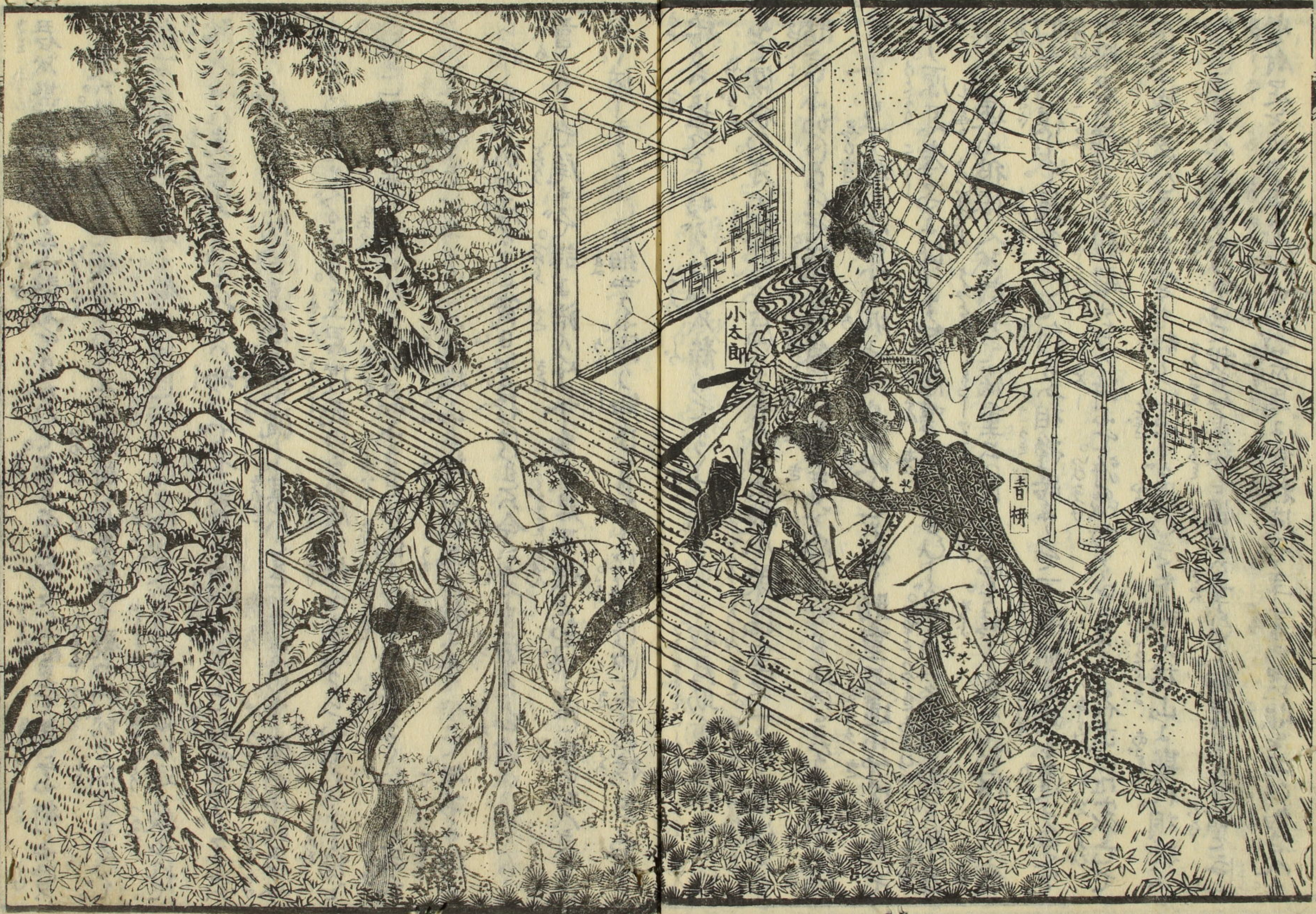
殺さる。其未練も。女。た。と。云。め。め。い。最。期。の。一。言。は。な。げ。り。い。人
 小。の。達。の。奴。家。が。思。ふ。志。気。は。云。傳。へ。と。多。く。奴。家。が。父。の。教。を。な。ぬ。の
 母。と。あ。れ。と。武。士。の。禄。も。食。ひ。の。り。が。不。圖。の。世。の。ま。ま。主。家。の。大。故。に
 家。亡。び。女。主。の。去。向。が。失。ひ。ぬ。父。其。の。ま。ま。か。た。ら。ひ。に。半。あ。れ。ぬ。
 女。主。の。在。家。と。索。ひ。て。一。言。は。述。て。老。角。も。さ。り。さ。り。の。思。ひ。と。身。乃
 負。し。け。り。旅。費。な。く。躊。躇。の。を。さ。る。も。忍。び。と。父。を。縛。り。て。此。身。を。美。徳。國
 の。音。登。の。里。に。名。を。り。万。長。が。許。し。賣。り。て。身。價。を。父。の。旅。費。と。な。し。て
 故。主。の。去。向。を。捜。索。し。ぬ。お。母。の。り。か。を。も。後。昔。を。後。終。り。音。同。は。此。身。の
 長。が。許。し。居。り。ま。柳。と。い。ふ。名。は。し。て。倡。婦。と。さ。り。て。さ。り。ち。あ。り。と。万。長
 去。年。の。秋。小。萩。と。い。ふ。美。藤。女。性。を。抱。え。り。と。倡。婦。と。せ。んと。さ。り。ぬ。と。い。ひ
 父。の。れ。と。此。女。同。様。と。い。ふ。奴。家。を。養。婦。と。し。下。さ。り。せ。り。使。ひ

目も悼し。おその物の数ともせむ。息んじて并へは。今縁故
 のて。小祿の賊。お奪われ跡。よて。其人の奴家。が父の。あはれる。娘ぞ。と。知て
 悔。あ。い。も。何方。よ。あ。を。き。こ。え。る。も。や。知。す。な。ま。れ。か。甲斐。も。あ。り。一。日。一。日。と。こ
 せ。ら。ち。今。年。の。秋。九。首。の。ころ。藤。沢。寺。の。上。人。の。一。人。の。餓。鬼。阿。弥。め。と。く
 ぶ。く。慈。舟。の。温。泉。ぶ。か。ら。入。と。て。昔。墓。の。里。ぶ。ら。は。ぶ。が。それ。よ。は。れ。そ。の。女。性
 の。り。それ。を。原。の。万。長。が。變。婦。あ。り。し。小。菟。よ。と。人。の。風。声。が。あ。る。の。あ。今。の
 今。の。主人。を。驚。け。る。報。り。し。も。あ。ら。う。や。と。道。十。一。と。今。い。か。か。か。て。ら。の。傍。お
 出。余。つ。る。を。き。ひ。と。鈍。く。も。慈。舟。入。行。道。の。同。人。が。あ。り。と。懇。お。は。ひ。ひ。い。と。は。し
 け。急。嬌。し。た。ま。う。た。ん。の。お。し。こ。の。頼。り。と。思。ひ。き。や。足。盗。賊。の。大。お。と。ら。れ。給。ふ
 此。女。を。娶。り。此。女。を。連。れ。妻。と。あ。ら。う。の。い。ふ。あ。ら。ね。縁。と。あ。れ。と。訓。傳。と。あ。

妹。脊。の。間。女。の。の。沙。ら。る。も。い。の。願。と。女。へ。の。爾。々。と。あ。ら。ぶ。女。が。母。で
 宿。志。を。遂。さ。し。お。き。せ。ん。と。云。一。言。語。か。刀。よ。ま。ら。ず。と。月。と。送。り。し。う。悪。女
 映。ぶ。が。は。孫。よ。は。れ。と。も。只。今。足。下。の。ま。に。死。ぬ。る。命。の。惜。し。み。と。我。父。親。乃
 志。氣。維。久。故。主。を。告。し。ま。ん。抑。故。主。と。い。ひ。け。ら。と。云。附。小。を。布。袴。り。と。を
 提。一。腕。を。放。ち。や。ら。う。と。座。と。言。語。を。正。し。ま。ん。名。武。常。陸。分。等。の。光。と
 あ。い。あ。ら。ざ。や。と。い。わ。れ。て。女。の。愕。然。と。怒。ら。れ。る。が。ら。小。太。郎。を。熱。く。う。ら。し。胸。を
 控。命。の。ご。故。主。と。い。ふ。の。光。と。は。一。は。し。ま。し。め。斯。云。奴。家。を。名。武。常。陸。の
 数。も。あ。ら。ね。下。の。女。の。お。し。こ。と。道。助。の。女。見。る。の。と。の。知。る。人。を。れ。賤。し。ま。し。月
 まで。は。ら。く。爾。宣。入。る。足。下。の。名。の。何。と。や。何。を。り。て。名。武。を。奴。家。が。故。主。と
 と。知。り。ま。ら。ぬ。と。も。お。し。こ。が。れ。子。細。と。結。り。ま。ら。れ。と。同。小。を。布。袴。双。眼。を。涙。で
 濡。め。し。傍。き。事。は。回。も。せ。ら。び。が。や。時。あ。り。て。鼻。う。ち。ら。ぬ。疑。ひ。老。の。

道江も斯云我れ小栗の昵近の臣の其一美登小栗判官久あり。
 と笑て女又敬馬父の野母及ぶ名武の口承の右に父定宅及て父へ
 多しその子息よとほまことう。いふも美登小四郎が世将也とあるもは汝
 が父の道みづより思て我知れり。ことごとく後は云知せん。そらまづおれたら
 姫君の口承の上も氣をなし。おとが今の勳の懸け入敷たるものとあるが
 其後のる知はるや青柳をたむらう。その去向の知れざれば。い
 ろも捜索やとて。斯くも身も瘦。憂き入場もせや。是何由るぞ父の
 為。その父親の口承果と知や。いと宣い。おとくは。いふに。いふも
 おろく涙のり。小太師とて。うちなして。後回。嘆息。凡。娼婦の口根を
 淳ま。る。こと。ま。う。は。く。生。つ。更。世。を。お。つ。る。お。お。お。我。お。結。つ。て
 笑。あ。ん。が。さ。こ。も。嘆。ん。不。侵。や。と。極。き。夫。夫。も。孝。心。と。感。る。涙。は。眼。と。る。を。た

結る。長。れ。て。お。つ。ら。公。公。静。め。て。う。く。笑。杯。そ。も。く。我。君。助。重。と。経。母。の。経
 ぬ。て。湯。衣。の。衣。を。忍。び。て。は。ゆ。き。と。う。ち。大。殿。小。栗。後。重。と。一。色。と。云。倭。人。の
 譜。言。ふ。か。け。ら。れ。て。鏡。倉。後。の。口。承。を。受。せ。せ。ら。る。の。こ。な。る。で。お。ん。傷
 す。く。も。下。総。の。小。栗。の。城。小。失。り。此。は。し。と。命。助。重。と。遥。小。は。じ。り。て
 より。原。身。孝。子。は。ゆ。き。せ。ん。悲。嘆。お。沈。む。ひ。が。此。り。一。色。詮。秀。が。所。為
 づ。れ。の。速。小。彼。倭。人。の。討。て。満。重。と。の。口。承。を。晴。し。め。り。お。は。は。は。は。我
 們。を。引。俱。と。鏡。倉。は。て。行。き。相。掛。路。中。と。不。圖。照。天。姫。も。遭。う。る。と。ぞ
 此。姫。君。の。豫。て。より。親。殿。と。の。許。せ。許。嫁。の。り。ら。ら。名。武。の。口。承。家。亡。て
 右。何。處。よ。忍。び。居。り。の。そ。の。知。り。て。さ。か。思。ひ。き。や。叔。父。横。山。は。懸。れ。相。掛。小
 お。じ。ま。さ。ん。と。の。安。秀。方。より。て。我。君。も。怨。を。懐。け。幸。ひ。と。姫。君。を。り。て。甜。と。は。
 勢。附。足。を。止。め。荒。馬。の。食。殺。は。て。年。暮。の。送。恨。を。多。し。知。さ。ん。と。



小太郎

春柳

西

十

十九

励^{あきら}し悲^{かな}したる道理^{道理}のつらき今又^{また}僕^{わが}の身を^み注^なしたるとさへはかみもめを
わらふ足^{あし}より姫^{ひめ}の口^{くち}殿^{どの}を慕^{あこが}ひ奉^{たが}ひてえまじ願^{ねが}ひして法^{はふ}共^{とも}に仇^{あか}しめ
横山^{よこやま}を討^うてこそ孝^{こと}と云^いへられ此志^{こゝろざこ}のありやと清^{きよ}められて青柳^{あおやなぎ}の刃^{やいば}を
起^{おこ}す一^{ひと}の首^{くび}にのりて憐^{あはれ}みするの心を^{こゝろ}ばらばらにせよ我^{われ}の教^{まね}を
はらふを悪^{あく}くちにおぼえて助^{たす}けざるのみすばらしき我^{われ}の教^{まね}を
深^{ふか}きは因^{いん}をよらそや甲斐^{あひ}さん女の身^みをばらばらも主^{ちゆう}と親^{おや}との仇^{あか}敵^{たか}とあら横山^{よこやま}
鬼神^{おに}でも蛇^{へび}でもめれば姫君^{ひめぎみ}は供^{たご}ひて二太刀^{にたて}の怨^{うらみ}をばらばらばらと
うつこそ健^{たけ}まるれ此時^{このとき}前^{まへ}列^{りつ}より重傷^{おもむき}をうけつる人^{ひと}を
がらと起^{おこ}すのさてもめれば助^{たす}けざる由^{よし}緒^つの者^{もの}をばらばらばらばらと
我^{われ}の足^{あし}横山^{よこやま}の部下^{した}に由^{よし}利^りの新^{あらた}意^いとせはらばらばら軍^{いくさ}はてめをばらばら首^{くび}
よりして旅^{たび}人の尋^{たず}常^{つね}にあらるものとせはらばら心^{こゝろ}油^{あぶら}のさき甲夜^{かよ}の不^ふ圖^ず傷^や痛^{いた}み

はばらばらもはらばらにまじりて幸^{あき}湯^ゆとせせら油^{あぶら}のさき討^う取^とる人^{ひと}をばらばらばら柳^{やなぎ}
かひでる名^な武^ぶの下^{した}僕^{しもべ}の女^め見^みとせしひやとせしつらふ知^しはばらばら生^{なま}むくも
のめらばと今日^{けふ}まで半^{はん}あはれはらばら汝^{なんぢ}を飽^あはれ旅^{たび}人^{ひと}を欺^{あざむ}はばらとめく錢^{ぜに}財^{ざい}を
奪^{うば}ひてあらばら今^{いま}がなれば生^{なま}おはせばはらばら悟^{さと}せよと云^いつても腰^{こし}の刀^{かたな}を
抜^ぬけし斬^きんとせしを小^こ右^{みぎ}将^{しょう}が其^{その}腕^{うで}をばらばら(やまよ青柳^{あおやなぎ}よ世^よ滅^{めつ}ばら怨^{うらみ}の縁^{ゆかり}子^こ
撃^うてられと汝^{なんぢ}の權^{けん}も夫^{おつと}とせし此^{この}月^{つき}の因^{いん}をばらばら又^{また}あらばはばらばら
小^こ右^{みぎ}主^{ぬし}の命^{いのち}を殺^{ころ}す汝^{なんぢ}や某^某が君^{きみ}をばらばらとせし(ひきてめめ)のしと
言^いはれと共^{とも}に投^な居^ゐて起^おこもまを首^{くび}討^うたし此^{この}折^し夜^よもくや明^あ且^つちくし擽^{ねぐさ}離^りる
鳥^{とり}の声^{こゑ}小^こ右^{みぎ}将^{しょう}とせし(うらむ)の鳥^{とり}の怨^{うらみ}の神^{かみ}使^{つかい}今^{いま}等^ら声^{こゑ}のばらばら主^{ぬし}に
はまぬ息^{いき}なう怨^{うらみ}除^{のぞ}くあらまのよしを神^{かみ}の告^つげあらば早く彼^{かれ}をばらばら
見^みとせせらとま上^{あひ}を青柳^{あおやなぎ}とめ奴^{やつ}も俱^{とも}もあらばらと云^いはらばら

易多れと年若れ女を貸し行へて人の見えぬも公憂し汝ハ跡より尋ねばと
 羨しぬと昔柳ハ魚目人の娶婦を拒むるに己うすひと潔くせんるものも
 なく。女の云をわらざる小を忍びぢうとたつ大謀を乱れり入羨のしこと
 のり忠我のちめ小斯とあり。些細のこにかははる大事を得るもあらずな
 非謗をうけ多し強て伴ひ多しれと申すも今世間の騷しな知ぬ
 旅路ハ女子の申冷まら命の世方の入といふも又禍に遭ふるに己父の
 公稟後むす忠をせんはらて前のゆゑにけはれり。はそれとも丈夫の出
 せし言語細も舌不及がぬとと思ふも伴ひもよそながら同じ旅路を行
 る雨さしてんぬ害の多し。しる尚厭ひもあらず。云よ小太郎うち微笑女子ハ
 心けり道にやうらふも述はる望まはし。決共小おほし。旅路を懸野まぐ
 しき旅奔さるねぐ。徳念殿を憚れぬ汝も我も牙と申し。懸舟を考ふ扮打ん

昔柳せめてうち懸し。命定ぬ爾公昔ハ賊の奪取しつ。道者の衣裳も公
 これみんるせと長櫃の裡を撈へては出せぬ。小太郎大きき喜びて物
 敷ふら主従切を全くと吉兆とこそ言ふ。いささしくとまわら。二人衣裳
 を急換はく。懸舟踏ましてまねぬ。茲に脱話する賊の横山が部下の城主
 由利の新發意とて限りなれ強盗也。此亦小巢穴を営み旅客を行劫ハ
 術計多かり。或ハ地獄の形を示し。又ハ猛獸怪異を現し。人々ハ臆ハ
 消し。公を失りて金銀衣服を奪ひ去る。そのなかには容貌美麗き女の
 あり。足さも奪ひ或ハ妾とし。あひの售れ斯惡逆をな行され。人の主命
 を奪ふ又多く。皇天の惡と云く。小太郎が為ハ一時生野をそと討れり。

小栗外傳卷之十三畢



